

## 【追悼】

# 三瀧信邦会員を偲んで

伊藤陽一\*

経済統計研究会（学会の前身）創設時から、長く会の運営に関わられ、研究上多くの貢献をされた三瀧信邦会員が、2010年10月2日に逝去された。享年91歳であった。筑波大学を63歳で定年退職されて城西大学に移られた後も、2000年前後まで氏は多方面で活躍された。80歳代を越えられてから学会の総会や支部の例会に御姿をみせなくなり、その後、体調の良いときに氏を囲む小さな会合があった。この追悼文は当初、学会創立時とともに行動されてティペット統計学を共訳された野村会員と、後進の伊藤との連名の予定であったが、野村会員の体調がすぐれないとのことで、伊藤単独のものとなった。

### 1. 年譜<sup>1)</sup>

氏の経歴は、以下のとおりである。筑波大学退職迄は、『筑波大学経済学論集』No. 11（1983年3月）「三瀧信邦教授退官記念号」による。

1919年4月4日 東京市麻布区仲之町11番地に生まれる、/1932年3月 東京市立麻布尋常小学校卒業 /1937年3月 第一東京市立中学校卒業 /1941年3月 東京高等学校文科乙類卒業 /1943年9月 東北帝国大学法文学部経済学科卒業/三菱経済研究所/海軍主計見習尉官（海軍経理学校）/1944年3月 海軍主計中尉（鎮海海軍軍需部）/1945年3月 海軍主計大尉（鎮海海軍軍需部）/11月 復員 /1946年6月 東北帝国大学助手

（法文学部）/1947年2月 統計委員会事務局（内閣へ出向）/1949年11月 東京教育大学・東京高等師範学校助教授 /1951年 同大学、同師範学校教授 /1952年3月 東京教育大学講師（文学部）（配置換）/1953年12月 同助教授 /1960年11月 同教授 /1967年3月～1968年4月 文部省在外研究員（オランダその他）/1974年6月 筑波大学教授（社会科学系）（配置換）。東京教育大学教授（文学部）併任・筑波大学社会科学系長。同大学評議員。東京教育大学大学院文学研究科担当 /1975年4月 筑波大学第一学群社会学類長。同大学評議員 /5月 筑波大学大学院社会科学研究所研究科担当 /1981年4月 筑波大学第一学群社会学類長・同大学評議員 /1983年3月 筑波大学を定年退官 /1984年4月～1990年3月 城西大学経済学部教授 /1990年4月～1992年3月 同学部招聘教授。この間、統計審議会分類部門専門委員他、多くの職を勤められる。/2010年3月 日本医大入院 /2010年10月2日 午前2時43分 肺炎で逝去

### 2. 研究

早くから統計制度・統計分類をとりあげ、統計学の広い問題へと移行しながら、1950年代から70年代半ば迄の氏の研究の重点は、中小企業や労働市場を中心とする実証的経済研究であった。

退官記念号の著作目録の約110件とそれ以後、主にほぼ1990年代終わりまで『統計学』に掲載されたものを中心に数えて約140弱の著作を幾つかの柱にわけてみる。

\* 法政大学名誉教授

〒192-0912 八王子市絹ヶ丘2-37-8

## 2.1 統計学関係

(1)統計分類 産業、職業分類や社会経済分類を中心とする経済統計分類論は、1950年代の論文からはじまって1983年の『経済統計分類論』における集大成と1985年の「1869年オーストリー職業分類論」をふくめて、氏の研究の中心的柱の1つである。氏は、問屋制家内工業、マニファクチュアを経ての資本主義の発展とともに職業、産業、従業上の地位が実体的に明確化し、対応して諸経済分類が採用されることを、分類の国際的・日本的経過での諸例と対比し、無業者分類の必要性、製造業中の出版等とサービス業の映画・放送等を同一にくるべきこと、日本での軍人の位置づけの曖昧性等を指摘した。これらは、現在もなお未克服の重要な点である。

(2)物価指数関係 50年代前半に実質賃金の算出で、名目賃金を消費者物価指数で除する作業での税金の処理や価格調査の正確性等で疑義を投げかけた氏は、その後も長くCPIや生計費指数に関して多くを著されている。その焦点の1つは、氏が座長を担った美濃部東京都政時代の東京都生計費指数研究会の提言にも関連する生計費指数擁護論である。要点は、CPIではなく、生計費指数が同一生活水準維持の指数、または賃上げ要求の根拠になるべきということにある。

(3)統計制度・統計改革 日本の政府統計制度の説明と問題点・改善方向の指摘をされていた。統計制度史への造詣と国際的知識をふまえて、日本の統計制度を「分散的中央集権型」と特徴づけられ、指定統計の問題点を適切に指摘され（『経済統計論』p.48）統計職員の削減への危惧と、特に地方統計の不足と制度の脆弱性、1984年改革への危惧等を表明されていた。

(4)統計学一般 ティベットの『統計学』（原書第二版）を1956に、第三版を1976年に野村良樹氏と東大出版から共訳出版された。その後、内海庫一郎・木村太郎氏と1966年に『統計

学』（有斐閣）を、改訂版を1976年に編集され、1978年に山田貢氏他との共著『統計学』、改訂版を1986年に、1985年に関弥三郎氏と共編で『テキストブック 経済統計論』を出版された。どの書物も、そのときどきに実に広く普及した統計学のテキストであった。

(5)その他 氏はオランダに滞在したことがあり、第2次大戦直後に統計委員会に勤務され、美濃部亮吉氏との数々の連携もあり、日本の明治以来の統計関係者や統計制度を、また国際統計界に知己を得て、オランダ統計組織、K.ラートゲン、法窓夜話、高野岩三郎の憲法草案、柳澤保恵、ホルヴァート追悼、そしてISIの46、47、48回、IAOS第1回大会報告、北朝鮮統計事情、中国統計学との交流等の小論をものにされていた。

## 2.2 賃金格差と労働力・就業構造、中小企業、物価等の実証研究

氏は、1950年代から1970年代半ばまで研究の中心を、中小企業や独占企業、労働力・就業、賃金格差、物価問題など、統計を丁寧使用した広い範囲の実質経済分析におかれていた。世界経済や社会主義体制を説明し、日本経済一般の検討を何回か行われている。

(6)賃金格差分析から労働市場・労働力・雇用構造分析へ 氏は1952年、賃上げの基礎とされたマーケットバスケット方式による理論生計費の算出方法の経過を丹念にフォローされて問題点を指摘し、10年間ほど賃金格差の実態に関する検討に従事された。なかでも（1956）『労働賃金』（中央経済社）では、当時の労資間の賃上げをめぐる対立の背後にあるものとして賃金格差に注目し、職種別等賃金実態調査と個人別賃金調査によって、規模、産業、性別、年齢、経験年数、職種別等にわたって詳細な調べをされた。当時、賃金格差の数少ない書であったろう。氏は、賃金の戦前・戦後比較も行い、関連して、中小企業の労働問題を何回か検討され、また広く労働

力・就業構造をもとりあげている。

(7)中小企業論と日本経済論 加藤誠一氏との共著で(1962, 65)『自由化と中小企業』、さらに(1966)『日本の中小企業—変動期に生きる道』を著し、1967年のオランダ留学の際の3テーマに唯一つの経済研究として中小企業研究をあげていた。1960年前後の日本経済の大きな焦点は中小企業問題であった。氏も当時の中小企業研究者の1人である。産業別にも中小企業をとりあげ、自由化・開放経済への移行で、倒産と大企業への組込みが進む過程をフォローされた。当然ながら戦後の日本の独占資本の発展との対応での論議であり、独占資本の動向も広く論じられていた。

(8)物価問題 物価指数研究との関係もあって、美濃部編『日本経済入門』他一連の日本経済分析書で、物価動向とその原因や実質賃金、家計への影響を論じ、所得政策批判を展開された。

### 3. 経済統計学会への貢献

氏の学会への貢献は多く、その批判精神によって長きにわたって学会の支柱の1人であった。

(1)学会創設期からの運営体制の定着への寄与 経済統計研究会創設前の研究会と1955年の『統計学』創刊、1957年の第1回研究会(関西大学)などで発起人ではなかったが、会の創設前後の1950年代に30歳半ばから活動しておられた。以後、1960年代から創立20年記念号(1976)を通して、会の運営体制がほぼ固まるまで、松川七郎氏や上杉正一郎氏を支えて、広田純氏や山田耕之介氏等とともに関東支部事務の責任者や全国運営委員であった。この支えは1990年前後まで続く。

(2)政府への意見提出等の実践的活動等 学会は、アカデミックな場で単に統計理論の展開のみに携わるのではなく、中央・地方の統計を必要に応じて批判し、また改善を具体的にはかること等を通じて、国民・市民・労働者

の要請に応えようとする実践的気風を継承している。政府統計への申し入れ等で氏がインシヤチブをとり、東京都生計費指数研究会も氏が座長であった。

(3)国際交流、特に中国統計学界との交流の重視 氏はオランダ留学やISIへの出席を通じて、アジア諸国や国際統計界との交流を重視・推進された。特に中国統計学界とは1980年代後半からの会員の個人的交流を経て、1995年の北京ISIに連ねて第1回日中経済統計学会議を開催するに至る。氏は団長として日本側25名を率いた。これが現在の「アジア統計研究部会」につながっている。

### 4. その他、思い出など

1960年代の半ばに東京教育大学での関東支部例会で札幌から上京してお会いしたのが最初で、筆者が1970年代の初めに東京に移って以来、美濃部都政下の東京都生計費指数研究会、上杉正一郎氏へのインタビュー他でのおつきあいであった。『統計学』編集や支部運営その他で注意を受けた。広田氏と共に神田や神楽坂の飲み屋を歩いたし、暑気払いとして渋谷のどぜう屋に皆さんを召集されたこともある。氏は、多くの場で批判的視角の薄い研究に対して注文を発したが、十分な配慮の下に、上下の別なく気さくに対応するソフトなお人柄が嫌味を消していた。格式や形式を極力排されて、献体を早くに決意され葬儀その他も辞退されてもいた。

以上は、実に多彩な人脈を持つておられた氏の活動のごく一端にすぎない。そこで、氏が追悼文集刊行世話人会代表をされた(1987)『人間 美濃部亮吉—美濃部さんを偲ぶ—』にふれる。美濃部元東京都知事とは40年間近く付き合い、敬愛していた感がある。氏自身も美濃部氏につながる何かがあった。この本に氏が寄せた(美濃部著の)「三冊の本」は、美濃部(1931)『カルテル・トラスト・コンツェルン』、(1958)『苦悶するデモクラシー』、

(1961)『統計におけるしんじつとぎまん』をあげている。後者2冊は、筆者もまた学生・院生時代に出版と同時に読んだ。市民向けの柔らかな文章ではあるが、内容は重要であると感じた。氏にもこの精神が強く刻み込まれていたように思われる。筆者も未読の人にこの2冊を推薦したい。

『人間一』の寄稿者は多彩で面白い。そこに「昭和35年に第一次安保騒動がおこった。

デモやストで大学内もてんやわんやだった。その最中に、反安保「知識人の会」(?)が文京公会堂で開かれた、三瀨・朝倉撰子氏司会で丸山真男氏と並んで美濃部先生が講演された」(小松聡氏)の文がある。氏の批判精神を示している。北朝鮮との友好団体に名があるが、これも美濃部氏等の人脈下にアジアとの友好を願ってきた氏の一面を示すと思う。ご冥福を祈ります。